



新年を迎えて

代表取締役社長 野澤 学

あけましておめでとうございます。

「THE CHEMICAL TIMES」をご愛読の皆様におかれましては、つつがなく良い新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年は、明治以降の憲政史上初めて譲位による皇位継承が行われ、皇太子徳仁親王が第126代天皇に即位されました。「令和」に新元号が改元され、祝賀ムードのなかで新しい時代への期待を感じた人も多かったのではないかと思います。また、初のアジア開催となったラグビーワールドカップでは、開催国の日本代表チームがベスト8にまで進出し、「ONE TEAM」を掲げチームの強い結束で強豪国と互角以上に渡り合う姿に感動したのではないのでしょうか。

日本経済は、長期化が懸念される米中貿易摩擦の影響や消費税の引き上げなどの景気減速局面を迎えております。一方では個人消費や設備投資などにおいて内需の底堅さが維持されており、加えて今年は東京オリンピック・パラリンピック開催で、関連需要の盛り上がり期待されるところです。ただ、人手不足の深刻化は、景気に対する重石となり下押し圧力となっておりますが、企業は生産性を高

めるため今後ますます合理化やAIやIoTの推進が図られ、今後も産官学一体となって我が国産業界の進化を世界に示してゆきたいところであります。

ところで、化学業界にある我々にとって嬉しいニュースもありました。旭化成名誉フェローで名城大学教授の吉野彰氏がノーベル化学賞を受賞しました。日本人として同賞を受賞するのは10人目であり、産業界からは2002年に受賞した田中耕一さん以来二人目であります。吉野氏の栄えある受賞を祝し謹んでお喜び申し上げますとともに、今後のご活躍を心より祈念いたします。受賞理由は「リチウムイオン二次電池の開発」ですが、企業での研究成果が高く評価されたことは、同じ産業界にいる立場として大変感慨深いものがあります。平成の時代における大きな変革の一つとして、ノートパソコン、携帯電話／スマートフォン等のモバイル通信機器の発展・普及が挙げられますが、その中でリチウムイオン二次電池の果たした役割は大変大きなものでした。我々のライフスタイルを変えた発明と言っても過言ではありません。更には、今後の環境問題解決の一つとして挙げられている電気自動車（EV）やPHVにおいても本発明はますます重要な役割を果たすものと期待されています。

当社は昨年11月で創立75周年を迎えました。これはひとえにお客様、お取引先の皆さま、読者の皆さまによるご厚情の賜物と厚く感謝申し上げます。当社は、試薬、ライフサイエンス、化成品、電子材料と多岐に亘る事業構成により、基礎研究から先端産業まで幅広く皆様のお役に立てるよう今後も努力してまいります。また、本誌は1950年の創刊以来、今号で255号となり、今後も引き続き科学の最新的话题を提供するべくますます充実した内容にするよう引き続き取り組んでまいりますので、皆様のご指導、ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

この一年が皆様にとって光輝に満ちた幸多い年でありますように祈念しております。